

現代アゼルバイジャンにおけるムスリム宗務局の社会的位置づけ

—カウンターバランスとしての宗務局—

平成 27 年入学

派遣先国：アゼルバイジャン共和国

岩倉 洸

キーワード：アゼルバイジャン，イスラーム管理，ムスリム宗務局，少数スンナ派，カウンターバランス

対象とする問題の概要

アゼルバイジャンは民族的にはテュルク系のアゼルバイジャン人が 90% 強，宗教構成ではシーア派 70%・スンナ派 25% とアゼルバイジャン人系ムスリムが大半を占める国家である。歴史的には宗教管理政策を取る政府とそれに協力してウラマー（イスラーム法学者）やモスクの管理・登録を一手に担ってきた社会団体のザカフカースムスリム宗務局（以下宗務局）によるイスラーム管理政策が行われてきた。管理政策によりアゼルバイジャンの人々は世俗的だと言われ，町を歩ければ酒・豚やスカーフ非着用の女性の姿を多数見かけることができる。その一方で，宗務局の管理に属さないイスラーム組織の活動が盛んになりつつある。政府や宗務局はそうしたイスラーム組織の活動を法律や警察などの力も利用しつつ管理しようとしている。

研究目的

これまでアゼルバイジャンのイスラームを取り扱った研究の多くが，政府及び政府に近い存在である宗務局の存在を軽視ないし無視して，宗務局管理外のイスラーム組織を取り扱ってきたものであった。しかし，政府や宗務局への考察なしではアゼルバイジャンのイスラームを理解することはできない。そのため，本研究ではアゼルバイジャン内のムスリムを管轄するザカフカースムスリム宗務局の政策とその社会的位置づけに着目していく。

このような点に着目することで，アゼルバイジャンにおけるイスラームの特質をこれまでのように政府外だけの視点のみならず政府側からの視点を与えることができる。また，アゼルバイジャンのみならず旧ソ連圏・社会主義圏のイスラームと政府との関係を考察するための貢献ができると考えている。

フィールドワークから得られた知見について

2016 年の 1 月 25 日～3 月 26 日にアゼルバイジャンに滞在した。主にカウンタパートナーである ADA 大学（アゼルバイジャン外交大学）に拠点を置きつつ，図書館や文書館で文献資料を集めた。また，首都バクーを含めたアゼルバイジャン各地のモスクや聖廟を訪れ参与観察やインタビューを行った。現地ではノウルーズ（イラン歴の新年）もあり貴重な体験ができた。

こうした調査により，アゼルバイジャンの人々は宗務局を「汚職にまみれた組織」「内務省のスパイの温床」という認識をしつつも「過激なシーア派やそれを扇動するイラン」に対するカウンターバランスとして必要な存在だと考えていたことを明らかにした。特に，この傾向が強いのは都市部の世俗的な人々と北部に多く居住しているスンナ派の人々であった。彼らはイランのような国になれば自身たちが

危うくなると警戒していた。また、少数の意見としては宗務局が行っているモスクや聖廟の新設や修復を評価しているものもあった。このことは裏を返せば宗務局が豊富な財源を持っていることを認め、そのうえでハード面でのイスラーム化が進むことに期待しているということである。

今後の展開・反省点

今回の主たる目的は文献調査を行うことであつたにも関わらず図書館・文書館の利用登録に必要な手続きが遅れた上に、貸出までに時間が掛かり思うように進めることができなかった。また、事前に予定していた宗務局在籍のウラマーとのインタビューを行うことができなかった。

もう1つの研究事項である人々とのインタビューの際には主にロシア語を使用したがる、ロシア語を上手く使えない若年層も少なからずいた。このような人々に出会ったときはソ連時代の教育を受けている人々を呼んでアゼルバイジャン語をロシア語に通訳してもらわなければまともに会話が成立しないことも多かった。

こうした点を踏まえて、次回のフィールドワークに向けて日本での事前準備をしっかりと行つたうえで、ロシア語のみならずアゼルバイジャン語も習得して研究に臨みたいと考える。



ノウルーズ（イラン暦の新年）の焚き火
元々はゾロアスター教の祭日である。



同じくノウルーズで踊る人々
普段スカーフ着用の人でも外して加わっている。



前大統領ヘイダル・アリエフのポスター
政府によるイスラーム管理政策の大枠はヘイダル・アリエフ時代に定まった。



首都バクーのタザピール・マスジドの金曜礼拝。
宗務局の本拠地でもある。



第2の都市ガンジャの聖廟廟（エマームザー
デ）の巡礼者。巡礼者は女性単独も多い。